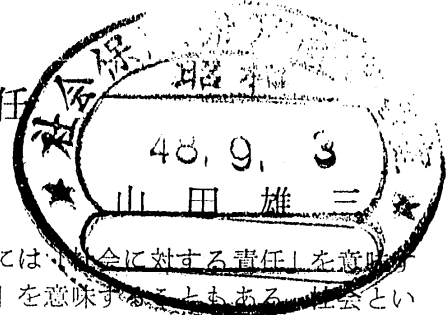


社会的責任



社会的責任という言葉がしきりに使われている。それは時には「社会に対する責任」を意味することもあるし、また時には「社会が共同して負うべき責任」を意味することもある。社会という語が、一方では対象を指し、他方では主体を指すのであろうが、いずれにしても今日は経済・社会の変化のために社会的責任が増大してきたことだけは疑いない。

社会が共同に負うべき責任が増大してきたというとき、一つには個人に責任のないような事故がふえてきたことと、二つには個人に責任があってもなくても個人では処置できないような事故がふえてきたことの二重のものが含まれるであろう。産業構造の変化のために職を失うのは前者であり、また老後に備えた貯蓄が物価騰貴のため思うにまかせなくなるのは後者である。個人的責任と社会的責任とのけじめがなかなかつかないのも、個人では処理のむずかしい事故が社会的責任と見なされ、したがって社会的責任に直接のものと間接のものと二つがからんで、その範囲をますます拡大していくからである。極めて広く考えれば人間としてこの世に生を享けること自体が社会的責任ともいえるわけであり、社会主義では多分にそういう見方が支配しているようである。

社会的責任という意識が根底にあって社会保障も成り立つといつてよい。制度的には各個人が拠出をして共同的に責任を果たす「保険」方式もあれば、国が公費負担によって責任を果たす「扶助」方式もある。しかも、保険方式といっても、社会保険のもとでは多分に国庫補助を含むし、また扶助方式といっても、単に生活保護のような困窮者の救済にとどまらず、国民各層の福祉増進をはかる政府の直接・間接の支出が含まれてきているのである。

ところで、社会が共同的に責任を負うということはしばしば誤解されている。とくに、日本では、社会的責任といえはすぐに国が一切の面倒を見るもの、個人は国におんぶするものと考えられやすい。個人のなかに潜む共同心とか公共心とかいう考え方が極めて薄いのである。もともと、日本の「公」というのは「私」と対立的なものと見られ、「公」は「私」に君臨するもの、「私」は「公」に奉仕するものと考えられ、もしくは「公」は「私」を圧迫するもの、「私」は「公」に抵抗するものと考えられやすい。いずれにせよ、「私」のなかに「公共心」が育てられるという考えからは遠いのである。社会保障についても、何もかも公費負担でやるべきものといわれたり、保険方式ははじめてから社会保障に反するものとされる。しかし、公共心とか連帯心とかないところには社会保障も福祉社会も育てられるはずはないのである。

いうまでもなく、公費負担は国税にもとづき、国税は国民各自の負担にもとづく。もちろん、公費負担による場合は保険方式による場合よりも、再分配効果が大であろう。しかし年金制度についていえば、オーストラリアやニュージーランドのような扶助方式と西ドイツやフランスのような保険方式とのいずれがよいか。もし給付水準の高いことを望むならば、保険方式によって、所得に応じて拠出し、拠出に応じて給付を与えるほうが、明らかによさそうである。東欧社会主義国も年金については保険方式をとっている。医療保障については必ずしもそういうことはいえない。ただイギリスやスウェーデンのような医療サービスの国が、そのために税金の負担が驚くほど高いことは疑いない。いずれにせよ、公費負担でやれば、給付も高くなり国民の負担も軽くなるという日本での俗論が間違っていることだけはたしかである。この俗論は公共心の欠如を意味し、公共心の欠如はどんな方式にせよ社会保障の発展に役立たないものである。